

現代日本における「パパ活」の進展と性の非対称性の検討 —イアン・ハッキング Grade of commitment 適用の試み—

松本 妃奈子

MATSUMOTO, Hinako

1 はじめに —本論で明らかにすること

本論では、現代日本における男女の性役割規範意識と性役割規範意識構造の非対称性を分析する。ここでの性役割および性規範とは、その性別に社会的に期待されている役割のことであり、その性別においてどのようにあるべきで、どのように行動し、どのようにふるまうべきかという考えである。現代日本において男女に期待される性役割、性規範が異なることを前提に、筆者は、女性が男性と比して、経済的な要因や意識的な要因などにより比較的に従属的な地位にあることと仮定した上で論を進める。本論では、この仮定の是非を考察すると同時に、男女を非対等な立場に向かわせる社会的な背景や要因を明らかにすることを目的とする。

本論では、性の非対称性とその社会的要因を明らかにするために、社会構築主義の枠組みを援用しながら、事例として「パパ活」を取り上げる。ここで留意したいのは、「パパ活」という現象の倫理的是非を問うことが目的ではないという点である。筆者がここで「パパ活」という事例を用いて明らかにしたいことは、〈買う〉⇔〈買われる〉という相互行為の倫理的是非ではなく、〈買う〉側、〈買われる〉側にジェンダーの偏りがあるという特徴がある点である。

2010年代後半から急激にその名が知られるようになった「パパ活」という現象は、既存の性役割、性規範に対する肯定的な態度ゆえの発生なのか、それとも否定的な態度ゆえの発生なのか。またその如何に関わらず、結果として既存の性役割規範意識や性役割規範構造にどのような影響を与えているのか。「パパ活」という現象を通して、性の非対称性の変化について明らかにする。

2 「性役割」、「性規範とはなにか」—『ジェンダー秩序』の援用

本稿ではまず、本論で言及する「性役割」、「性規範」の定義を明確にしたい。

戦後、日本の家族は「近代家族」と呼ばれる家族形態へと変容し、「男性が外で働き、女性が家事・育児を行う」といった日本型性別役割分業家族が一般化した。性別役割分業の普及と女性の主婦化が進展していくと同時に、男性は自身が家庭内の主たる経済活動の担い手であるという、女性は自身が家事・育児などのケアの担い手であるという性規範を内面化していったのである。

この概念をより明確にするために本稿では江原(2001)の『ジェンダー秩序』を参照する。

江原は『ジェンダー秩序』において、ジェンダー秩序とは、「男らしさ」「女らしさ」という意味でのジェンダーと、男女間の権力関係である「性支配」を、同時に産出していく社会実践のパターンを意味するとし、ジェンダーと「性支配」が、ジェンダー秩序に沿った社会的実践の持続によって、同時に社会的に構築されるとしている。またここで江原が用いる「性支配」とは、「男性」「女性」として社会的に構築された性別を持つ「主体」（「ジェンダー化された主体」）間における「支配—被支配」に関係をいう。また「支配—被支配」の関係は、社会の様々な場において、特定の「主体」の権力が他の「主体」の権力を上回るような事態が頻繁に生じる状態をいう。この江原の「ジェンダー秩序」の概念を念頭に、次節では「パパ活」という現象の進展をみていく。

3 「パパ活」という現象の進展

まずここで本論の議論の中心に据えられる「パパ活」という現象とは何かについて言及したい。「パパ活」とは、女性が男性と食事などのデートをして、その対価に金銭などの援助を受ける活動をいう。金銭などの援助をする側の男性は「パパ」と呼ばれ比較的的に経済的に裕福な男性が多く、「パパ活」を行う女性は「パパ活女子」と呼ばれ、この二者間でやり取りされる援助は「お手当」と称される。また「パパ活」を行う行為者には多様性があるものの、この「パパ」と「パパ活女子」と呼ばれる行為者間に親子ほどの年齢差があることが多い点の特徴である。そして、この二者間の相互行為において、食事やデートなどの対価として「お手当」と称される金銭などの援助の授受は行われるが、「金銭を媒介している」という点は、その行為をいわゆる「恋愛」と区別するという点において、その行為を「パパ活」と決定する上で重要な要素である。

2017年にはフジテレビ系列で「パパ活」というタイトルのドラマが放映され、本現象の社会的認知度を高めた。「パパ活」は主に大都市圏で匿名性の高い特異な環境を背景に、密かに進展している社会現象である。この「パパ活」が進展していることは、2021年2月時点で検索エンジン google において「パパ活」というキーワードを検索すると約5,300万件のウェブサイトがヒットすることや、以下グラフで示す通り検索エンジン google での検索数が上昇していることを見ても明らかである。

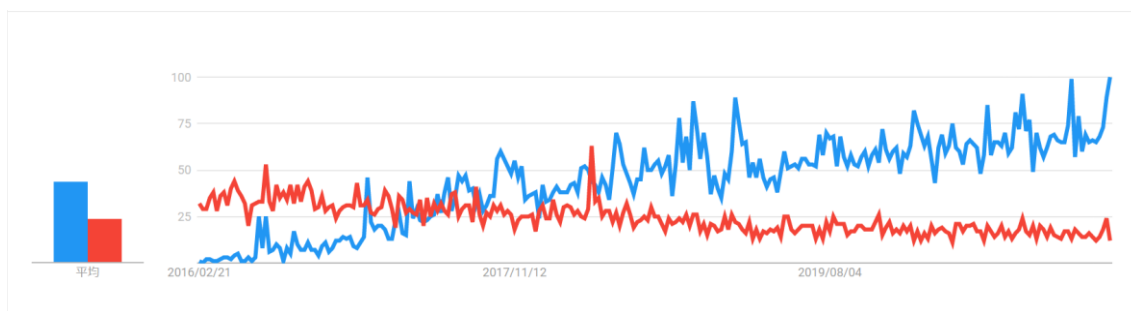


図1 「Googleトレンドにおける単語「パパ活」、「援助交際」の検索結果」
青字ワード:「パパ活」、赤字ワード:「援助交際」(※1)

このグラフを見る通り、「パパ活」(グラフにて青字で記載)という言葉は2016年以降に急激に浸透している。「パパ活」という言葉の名づけ自体は、「パパ活」斡旋業者の最大手である交際クラブ「ユニバース倶楽部」が会議の中で、素人女性の参入をもくろみ、その当時流行していた「婚活」や「就活」を模して「パパ活」というカジュアルでライトな印象を与える名前を付けた。その後、インターネット上の広告形態の一種であるアフィリエイトを通して、「パパ活」という言葉が浸透していき、今では民放キー局のニュースやバラエティ番組でも取り上げられるほどの認知度を得る言葉となっていったのである。

「パパ活」での男女の出会いの方法には、様々なタイプがある。例えば「パパ活」用のサイトやアプリのマッチングサービス、ギャラ飲みと呼ばれる女性に金銭を支払うことを前提に飲み会の場をセッティングするサービス、交際クラブ、Twitter 経由での個人募集や、パパ活を斡旋する業者および個人による紹介など、出会いの方法は様々である。

中でも、Sugar Daddy と呼ばれるサイトは、インターネット異性紹介事業として届け出がされており、サイトには「夢や目標がある魅力的な女性」と「成功者である紳士的な男性」の上質な出会いを提供するマッチングサイト」と謳い文句が掲載されている(※2)。本サイトは、男女ともに検索条件を設定することが出来、目的・地域・年齢・デート日程などの項目から、目的に合った相手を探すことができるサービスである。女性側のプロフィールには交際タイプを「まずは食事から」「相手に合わせる」「積極的」と3つの選択肢の中から設定することができ、女性は男性を「年収」や「資産」で検索することができる。

「男性と一緒に食事をするだけで5万円がもらえる」などといった謳い文句で昨今注目を集めている「パパ活」であるが、個人間でのやりとりのため不透明な部分は多く、男女の交際の実態の内実把握困難である。実情として、食事だけのみの関係を結んでいる「パパ活」もあれば、食事だけではなく性行為を伴う関係を結んでいる「パパ活」もあることは、Twitter 上に散見される言説や上記サイトの Sugar Daddy においても交際タイプが「まずは食事から」から「積極的」という項目があることより、容易に推察可能である。

しかし、本論では「パパ活」の内実が食事だけなのか、それとも性行為も含むのかという

点においては論点にはしない。「パパ活」を主題に取り上げる場合、女性が男性から性的行為などの対価に金銭を受け取る活動は、各時代において名前を変えて何度も話題になる広義の意味での売買春の一種なのではないか、という問いかけが往々にしてなされる。実際に日本では過去にも、1980年代には「愛人バンク」、1990年代は「援助交際」などが社会現象になり、古くからキャバクラや風俗店ではなく「素人女性と関係を持つ」という男性側のニーズは存在しており、「パパ活」は「援助交際」の置き換えではないかという指摘はしばしなされている。確かに先述したグラフでも、赤字で記載されている「援助交際」のワード検索数が2014年より減少するのに反比例して、2016年以降「パパ活」の検索数が上昇していることからこの二つの言葉には相関関係があることは推察できる。上述の通り、「パパ活」は個人間でのやりとりのため不明瞭な部分が多く、この行為が果たして本当に食事のみなのか、それともそれ以上の性的サービスを伴うかについては更なる調査が必要であろう。

「パパ活」に性的サービスが含まれる場合、「パパ活」は売春防止法の第2条で定義されている「売春」とは、対価を受け、又は受ける約束で、不特定の相手方と性交することをいう」という規定に当たるかどうかで言えば、グレーゾーンに当たるかもしれない。けれども『パパ活の社会学』において記載されているケースを見ると、「パパ活」は単純売買春とは異なり、関係を食事からスタートし、それ以上の関係になるか否かは相互の交渉のプロセスを経ており、また単発ではなく疑似恋愛関係の継続性のあるケースも多いことより、単純な売買春よりも複雑である。

また「パパ活」は女性が男性と食事をするだけで対価を得ることのできる安全で容易なサービスであると謳い、「パパ活女子」を集めようとする業者の意図がある一方で、男性側には、女性とお食事以上のことをすることができると謳うというような、二重のプロモーションもされており、女性側の期待と男性側の期待のミスマッチが理由に起こる性的被害なども社会問題である。

このように「パパ活」を議論する上で、「パパ活」とは「誰が」「誰と」「何を」交換する行為なのかを明確にすることは重要であるが、ここではその分析や、その行為を疑似恋愛なのか、性に関わるサービスの一種であると位置付けるのか、またその行為の是非を問うことはしない。また「パパ活」という現象の背景には、「男女間格差」や「女性の貧困」の問題や男性側が年上の既婚者であることが多いために「不倫」や「婚姻外の性愛関係」などの男性側の二重規範の問題や、女性側の「ブランド志向」やSNS時代の「自己顕示」の問題など、多種多様かつ複雑な要因が絡み合っているであろうことは推察される。「パパ活」という現象は2021年という時代性を反映するがゆえに複雑な要因が絡み合っており、女性の貧困問題や男女間の格差の問題、売買春フレームにあてはめ善悪二元論に単純に還元することで、「パパ活」のもつ時代性や複雑性が不可視化されてしまう懸念がある。

また、男女間での金銭授受による非対称な関係は性別役割分業が色濃い、近代日本型家族における婚姻関係にも共通しており、それに関しては学問的な知見が多く蓄積されている。

また援助交際に関しても1990年以降、宮台真司らによって学問的な整理が多くなされておる。上記と同様なフレーム上での現象と捉えることも可能であるにもかかわらず、「パパ活」という現象を分析対象とする文献は極めて少ない(2021年2月時点ではCiNi上において「パパ活」について書かれた論文は存在しない)。先行研究が少なくかつ急激に進展しつつある本現象を記述し、現代日本社会における本現象が担う役割を明確にすることは、学問的に極めて重要であるが、本論では紙幅の関係上、焦点を絞って論を進めたい。

上記の通り、本論においては、あえて議論の焦点を「パパ活」の主体である女性のジェンダー規範に限定し分析を進めていく。「パパ活」という相互行為は、ジェンダーの非対称性に対する肯定的態度の現れなのか、それとも否定的であるがゆえにそれを逆手にとった態度なのだろうか。また、「パパ活」という相互行為は、肯定的態度であれ否定的であるがゆえにそれを逆手に取った行動であれ、結果として近代家族モデルのジェンダー役割、ジェンダー規範を強化することになっているのではないだろうか。次節では、「パパ活」にまつわる言説を参照し、「パパ活」の主体である女性のジェンダー規範について分析する。

4 ジェンダー規範の変化—『The social construction of What?』を用いて

ジェンダー規範の変化を分析するにあたって、本論では分析枠組みとして、哲学者イアン・ハッキングの著書「The social construction of What?」における「Grade of Commitment」という概念を参照したい。ハッキングは本書において、そもそも社会的構築とは何か、社会構築主義とは何かという定義を望むのではなく、「なぜ社会的構築」という言葉を用いるのか、その目的を問うことこそが重要であると論じている。また、「社会的構築」という表現がこれまで使用されてきた理由は、「社会的構築」という言葉を用いて人々の問題意識を喚起するためであり、前提として社会構築主義は社会の現状に対して批判的であると指摘する(Hacking, 1999:15)。この背景として、不満に感じている状況そのものが不可避ではなかった、すなわち社会的構築されていると主張したいがゆえに、「社会的構築」という言葉を用いると述べているのである。

そこでハッキングは著書の中で以下の命題を提示している。

(1) Xの存在には必然性はない。

(2) Xの今の状態はまずい。

(3) Xがない方が(あるいはXの形が根本的に変えられた方が)よい世の中になる。

またこの命題の前提には、命題(0)が暗黙の了解として隠れていることを指摘する。

(0) 今の世の中ではXの存在は不可避だと思われる。

筆者はハッキングが提示する命題に対し、Xにジェンダーを当てはめ分析を進める。ハッキングは同書の中で、「Grade of Commitment」(Hacking:43)という概念を提示している。この概念は、上記の命題(1)、(2)、(3)に対する反応が次第に強くなることで、社会構築主義へのコミットメントには段階が生まれると述べている。このコミットメントの段階とは以下6つの種類と5つの段階である。

Historical
Ironic
Reformist Unmasking
Rebellious
Revolutionary

まず、社会構築主義への最もコミットメントの程度が低い段階を Historical(歴史的な態度)としている。Xは社会的な過程を経て構築されてきたものだろうとし、Xは不可避であることにはほど遠く、むしろ歴史的な出来事から産まれた偶然の産物に過ぎないという態度である。次にもう一段階コミットメントの程度を強くした段階は、Ironic(皮肉的な態度)である。この段階は、我々が不可避だと思い込んでいるXは、現状とは全く異なるあり様であったかもしれない。それにも関わらず、我々はXに囚われており、Xは今後自然と時代と共に移り変わるかもしれないが、今すぐにその現状を変えろと言われても今すぐには何もできないという態度である。Xは社会的な歴史や社会的な力の産物であり、きわめて偶発的なものである。けれども、私たちの世界の一部としてXを取り扱わずにはいられないのである。

次に一段階コミットメントの程度を強くした3つ目の段階は、Reformist および Unmasking(改善主義的態度/仮面をはがした態度)である。この3つ目の段階では命題(2)の「Xは今のままではかなり悪い」を真剣に受け止めている。改善主義的な立場は、確かに今のところXなしにどうやって生活をしていくのかは分からない。しかし、Xが不可避ではなかったことを鑑みると、Xをましなものにするために現状では少なくともXのいくつかの側面を修正することが可能であるとする。この改善主義的立場と同程度のコミットメントとされるのが、マスクをはがした立場である。この立場は誤った権威を取り除くためにX自体を解体するのではなく、その機能の一部を露呈することによって、仮面をはぎ取ることを目的とするのである。

続いて、そこから更に一步踏み出した立場が、Rebellious(反抗的態度)である。この立場は、積極的に命題(1)、(2)、(3)を支持し体を張って主張する。そして、最も強いコミットメントの段階は Revolutionary(革命的態度)である。この立場は、Xをなくすために世の中そのものを変えようと行動を起こす活動家のレベルである。

ハッキングは、私たちの命題Xへの問題意識が高まるにつれて、歴史的態度、皮肉の態度、改良主義的態度とコミットメントの度合いを強めていき、更にはXの一部機能や役割の仮面をはがしたりするようになり、その仮面が取り除かれると、更に反抗的態度へと変遷し、少数の者は革命的態度にまで態度を変化させることを提示している。

ここで、命題Xに「ジェンダー」を当てはめ、ハッキングの提示する概念「Grade of Commitment」を再考する。

命題は以下の通りである。

(0)今の世の中ではジェンダーの存在は不可避だと思われている。

(1)ジェンダーの存在には必然性はない。

(2)ジェンダーの今の状態はまずい。

(3)ジェンダーがない方が(あるいはジェンダーの形が根本的に変えられた方が)よい世の中になる。

ここでコミットメントの段階の概念を明瞭にするために、「女性が男性にサラダを取り分ける」という行為を、サラダを取り分ける側の女性に焦点を当てて例示する。ここでは、女性が男性に対して必ずしもサラダを取り分ける必要はないこと、また男性もサラダを取り分けられることを期待する人々ばかりではなく、むしろ率先して女性にサラダを取り分ける男性もいるため、もちろん一括りに論じることはできないことは念頭に置いた上で、この命題とコミットメントの段階を簡略化して理解可能にするために上記を例として取り上げる。

Historical(歴史的)な態度の女性は、ジェンダーの存在は不可避とは程遠い、歴史的なものであると考えているので、「女に生まれたのだから、女性が男性にサラダを取り分けることは当然」と考え、率先してサラダを取り分けるだろう。次なるIronic(皮肉の)な態度の女性は、もしかするとジェンダーのあり様は今とは異なった形かもしれないけれど、現状の世界を成している一部なので、仕方ないと受け入れている。よって、女性の役割なので仕方ないとして、男性にサラダを取り分けるだろう。続いてコミットメント3つ目の段階のReformist/Unmasking(改善主義的/仮面はがし的)な態度の女性は、女性がサラダを取り分けることを当然視するようなジェンダーの今のありようはよくないと考えている一方で、ジェンダーそのものの現状のありようの変え方自体は分からないが、部分的には修正が可能であるとするので、サラダを取り分けることにやや疑問的である。よって、テーブルにサラダが置かれた際には、誰か(その場にいる男性)が取り分けるかもしれないと、サラダを率先して取り分けるのではなく、少し待ち様子をうかがうかもしれない。

次に段階を上げたRebellious(反抗的)な態度の女性は、上記の命題を体を張って主張するために、「わたしは男性に対してサラダは絶対に取り分けたい」という態度を取り、自分の分のみしかサラダを取り分けたいかもしれない。そして、最もコミットメントの強い

段階の Revolutionary(革命的な)態度の女性は、ジェンダーそのものをなくすために世界そのものを変えようとする考えなので、「なぜあなたはサラダを取り分けしようとしなのか。サラダを取り分けるのは女性の仕事ではない。」と、サラダを取り分けようとしない男性に対して意思を表明するまでに至るかもしれない。

ハッキングの提示したように、命題「ジェンダー」への問題意識が高まるにつれて、コミットメントの度合いを高めていき、態度を変化させていくことを理解できるだろう。一方で、こんな疑問が湧き出てくる。命題「ジェンダー」への問題意識とコミットメント度合いが強まることと、それを態度に表出し変化させることは比例するのだろうか。果たして、人間の行動とはそんなに単純なものだろうか。だとすれば、こんなにも男女の性差にまつわる問題が取り上げられている中で、男女の持つジェンダー役割やジェンダー規範が大きく変化しているはずだろう。けれども、現実はそのよう簡単ではない。

そこで筆者は問題意識やコミットメントの度合いと態度の変化がそう簡単には比例しないことを「反抗の重層性」として次節で示したい。

5 ジェンダー規範の反抗の重層性—「パパ活の事例」

男女の性役割の違いに基づく性規範の形成は、幼少期から定着し内面化する。たとえば、産科医は子どもが生まれた瞬間から、母親に「元気な男の子ですよ」または「元気な女の子ですよ」と声をかけ出産の労をねぎらう。そして、子どもが成長するに伴い、女兒はままと遊びをし母親などの家庭内役割を模倣し、男児は戦隊ものごっこをして戦い、遊ぶようになる。更に成長すると、大半の中学校や高校では男子生徒にはズボンの制服を、女子生徒にはスカートの制服を選択の余地なく、自然と着用することを当然視し提供する。また、身に着ける衣服に合わせて、スカートをはく女性は足を閉じ身体を小さく使用しふるまうことが美しいとされ、男性はズボンをはくことで足を広げて座るなど身体を大きく使用する権利が与えられ、性役割規範意識を内面化するとともに、身体レベルで身に付けていくのである。このように社会学者ブルデューが提唱した「ハビトゥス」レベルでの内面化と身体化は、自身でも気付かないほど無意識に習慣化されるのである。

哲学者ジュディス・バトラーは著書『ジェンダー・トラブル』において、近代社会は個人が主体として自明であるかのように前提とされているが、実際には歴史や社会による制約が「主体」の中に入り込んでおり、「主体」は様々な抑圧を受けているのではないか、という問題意識を挙げている。上記のイアン・ハッキングの Grade of commitment では、命題への問題意識が高まるにつれて、命題へのコミットメントの度合いを高め、それが態度を変容させるという概念を提示しているが、個人という「主体」は様々な抑圧を受けており、ハビトゥスレベルで内面化/身体化された日常的態度を変容させることは容易ではない。

現代日本においては、男女の性役割は支配的であり、男性は社会において中心的な役割で

ある一方で、女性は結婚や出産を機に男性や子どものケアを担う補助的な役割を担う。このような既存の性役割規範意識構造に対し疑問を持ち、反抗的な態度を表明する女性は、その主張の内容の是非に関わらず安易に「フェミニスト」や気難しい人であるというレッテルを貼られ、腫れ物のように避けられる傾向にある。そのような声を上げることでの変化が享受しづらい状況の中で、あからさまに反抗的な態度を取ることへのメリットを感じづらく抵抗することを諦めている女性が増加していることは、想像に難くない。けれども、女性が反抗的な態度を明示しないからと言って、既存の性役割規範意識に対する変化が起きていないこととは同義ではないのである。

現代日本においては、男性は女性と比して、外で働き経済的にも優位であるし、夫や子どものケアに追われる女性よりも飲み会に参加するなど女性よりも時間的な自由が確保しやすい状況にある。このことより、男性は家庭内での父親／夫役割をまっとうしながら、「パパ」として「パパ活」に参加するなど家庭の内外を横断することが可能である。しかし一方、女性は、結婚や出産を経て、仕事と家事・育児の両立を行うことにより、家庭内にとどまる時間が男性に比べると多い傾向にあり、また良妻賢母思想により婚姻外での恋愛や性的な活動を行うと男性以上に糾弾されうる可能性をはらむ。結婚生活には、個々の家族内での取り決めなど多様な家族のあり方があるものの、男性には男性の役割を、女性には女性の役割を期待されるのである。

前述のイアン・ハッキングの提示したように既存のジェンダー構造に対して態度を強め、意思を表明することだけが「反抗」ではない。むしろ既存のジェンダー役割やジェンダー規範に対して問題意識を持ち皮肉的に捉えるがゆえに、今まで女性が無償で行って当然とされていた行為に対して疑問を持ち、「パパ活」という無料よりも金銭という対価が得られる行為を女性側が選び取っているという見方もできるのではないだろうか。しかし、例え逆手に取る戦略として「パパ活」を行っていたとしても、その行為が結果として、既存の性支配の構造を強化しているおり、「パパ活」を行う女性が性支配の構造の中に、より深く絡めとられているのも現実である。

けれども、女性の内面の意識と外面の態度の表出に乖離があったとしても、それは女性にとって、やり過ぎすという一種の「戦略」なのである。すなわち、ジェンダー規範の内実の変化や「パパ活」現象の進展は女性の戦略の変化と捉えることができるだろう。女性に対して一面的な変化を求めることは、ジェンダー構造の中で男性に比して弱い立場に置かれる女性に対して「戦わないこと」を責めることや、女性同士での分断を生むことに繋がりがかねない。女性のジェンダー規範の変化を一面的なものとして捉えるのではなく、その変化の多重性、多面性、重層性に着目し、現代日本に生きる女性の直面する困難を軽減していくことこそが取り組むべき課題なのである。多様性や他者への寛容が声高に叫ばれる昨今、「パパ活」を単純に性を商品化する行為として批判的に見るのではなく、女性の反抗の重層化として捉える視点も必要であると、筆者は強く強調したいのである。

6 おわりに

本論では、「パパ活」と「パパ活」を行う女性のジェンダー規範が一様ではないことを示すにとどまった。「パパ活」における男女間での〈買う〉⇔〈買われる〉という非対称的な構造は、日本における男女の固定的な性役割と性規範がもたらしているであろう点は推察できるが、今後、女性側や男性側の双方にインタビューを実施し、性役割規範意識を調査する必要がある。「パパ活」とは自由恋愛としての関係を前提とすることにより、法的には売春ではないと位置づけられる(※3)。しかし、恋愛とは対等な関係を前提としており、〈買う側⇔買われる側〉という経済的な上下関係や〈買う側〉⇔〈買われる側〉にジェンダーの偏りのある「パパ活」の関係は、対等であるとは言い難く、「パパ活」の最たる特徴はこの「対等ではない関係」に見出せる。

現代日本においては、平均初婚年齢が上昇し、晩婚化が進展している。この晩婚化に伴って、自身が育ってきた家族から、自身が新たに形成する家族への移行期間が長期化している。個人のライフコースの中でのシングル期間の増大は、ライフスタイルの多様化をもたらすが、結婚に直結しない恋愛はその1つである。その中でも、「パパ活」という現象は、女性側にとって「職業としての恋愛」の一種であると考察することも可能であろう。「パパ活」を疑似恋愛とみるか、性的サービスとみるかという内実については引き続き検討が必要である。そもそも、「パパ活」という現象自体が、女性が経済的に充足していれば見られない現象であろうし、婚姻自体にメリットがあれば女性は「パパ活」よりも「婚活」に励んだほうがよいと判断する。婚姻により扶養される前提が、以前ほど成り立たなくなったからこそ、低収入の男性と結婚するよりも、高収入の男性と「パパ活」をしたほうが経済的に合理的であるという判断に至るのであろう。結婚や恋愛に直結しない「資本主義化する恋愛」も、その背景にある固定的な性規範の変化と関連づけて引き続き分析を進めたい。

参考文献

イアン・ハッキング, 出口康夫/久米暁 訳, 2006『何が社会的に構築されるのか』, 岩波書店.

Ian Hacking, 1999, *The Social Construction of What?*, Harvard University Press.

上野千鶴子, 1985『資本制と家事労働—マルクス主義フェミニズムの問題構制』, 海鳴社.

江原由美子, 2001『ジェンダー秩序』, 勁草書房.

江原由美子, 2012『自己決定権とジェンダー』, 岩波人文書セレクション.

坂爪真吾, 2018『パパ活の社会学—援助交際、愛人契約と何が違う?』, 光文社.

牟田和恵 編, 2009『家族を超える社会学—新たな生の基盤を求めて』, 新曜社.

※1 <https://sugardaddy.jp/> (2020年2月10日閲覧)

※2

<https://trends.google.co.jp/trends/explore?date=2016-02-17%202021-02-17&geo=JP&q=%E3%83%91%E3%83%91%E6%B4%BB,%E6%8F%B4%E5%8A%A9%E4%BA%A4%E9%9A%9B>
(2020年2月17日閲覧)

※3 デートクラブの法令による場合

東京都デートクラブ営業等の規制に関する条例、平成9年6月13日、条例第68号